

【ポスター発表】

脱<ひきこもり>支援施策への提言

— あいまいな支援が見逃すもの —

○聖徳大学短期大学部 檜垣昌也 (004075)

<ひきこもり>・脱<ひきこもり>支援・脱<ひきこもり>支援の内容

1. 研究目的

<ひきこもり>が、“問題化”してから20年が経過している。報告者は<ひきこもり>とされる人々、彼らに関わる人々、そして<ひきこもり>という言葉に意味を持たせる言説者を含めた周囲を含め、この現象を考察している。

<ひきこもり>という言葉の国語的な使用は、近年(約20年間)のものであり、その用法も急速に拡大されてきた。報告者はこれまでも、<ひきこもり>という言葉の国語辞典的な意味、専門用語、現代用語としての使われ方から、<ひきこもり>という言葉の生成の過程を探り、このことから言葉のあいまいさを指摘してきた。このあいまいさのまま定義化されたことによる政策の不一致が、問題解決の過程に与えた影響は決して少なくないと考える。

これまでの報告者の報告・発表の場でも感じているが、流通している<ひきこもり>の定義が対象者を明確にしないため、<ひきこもり>という言葉を発表する報告者と、その言葉を受け取る聴衆の間に齟齬が生じることとなる。これが文学としての発信であれば、その意味内容は受け手にゆだねられるため、発信・受信が成立するが、社会科学の場では、<ひきこもり>という言葉が意味することをめぐり、発信・受信が成立しない。

<ひきこもり>という言葉が持つイメージは、個人がそれぞれの持つ<ひきこもり>とされる人のイメージに強く影響を受けて一人一人が<ひきこもり>とされる人やその状態像を描くことになる。

このように<ひきこもり>という言葉は、あいまいな部分を残しながら、問題視される対象として語られ、福祉の分野では支援の俎上に乗ってきた。この状況が20年以上経過しているが、言葉の定着とは裏腹に、効果的な支援というものは見当たらない。報告者は効果的な支援、いわゆる“特効薬”を求めているわけではなく、あいまいな意味づけのまま、支援策がアップデートされている<ひきこもり>支援そのものを考察している。

2. 研究の視点および方法

本報告では、<ひきこもり>施策の場、<ひきこもり>支援の場、メディア、日常など様々な場で使用される<ひきこもり>について、内容分析を行う。

報告者は、<ひきこもり>という言葉に親和性を持つものが集まる場を運営しているが、本報告ではこの場の参加者を研究対象とはしない。その対象者が<ひきこもり>を指し示すために例示するケースを扱うことにより、3で示す倫理的配慮を担保した研究とする。

報告者の実践の場も含め、そこで扱われている〈ひきこもり〉像を抽出し、付随する情報を吟味する。この付随する情報をもつ状況を整理・検討し、本来、目を向けるべき支援を提示する。

3. 倫理的配慮

〈ひきこもり〉を対象とした研究や言説はすでに多くのものが流通している。本報告ではこれら流通している〈ひきこもり〉の事例を対象とするいわゆる二次資料の研究である。

既述の通り、報告者は実践の場を通して参与観察の場も有しているが、そこで得たものは知見として本報告には影響を与えるが、実践の場での個人そのものを対象とはしていないため、日本社会福祉学会研究倫理指針沿ったものである。

また、本報告に関連して開示すべき COI 関係にある企業等はないことも付記する。

4. 研究結果

記述の通り、報告者は実践の場も含め、〈ひきこもり〉という言葉が、この言葉を使用する者により、様々な意味を持たされ使用されてきていることを実感してきた。

本報告では、この報告者が感じる違和感を、二次資料分析から抽出・例示する。

先行研究者や言説者が、〈ひきこもり〉として例示する条件・要素は、一般に流通する厚生労働省が定義に合致しないもの（厚生労働省の提示した、相談支援のためのガイドラインで述べられる「多種多様」という言葉には合致）。早急に解決すべき課題は他にあるケース。〈ひきこもり〉経験者として支援の俎上に乗るケースなどまさに「多種多様」であることが改めて明確になった。

5. 考察

本報告では内容分析から事例検討を試みた。ここから見えてくるものは、ある事象が問題化され、その対策が打たれたにもかかわらず、数量的な把握では増加していることについての評価をする必要性である。この増加の要因を既存の制度では対象とされなかった者、言い換えれば制度化されなかった者の 20 年の累積や顕在化である。

厚生労働省の公開データでは、〈ひきこもり〉とされるものには、男女の差が大きく、また生活の実態が不十分であることが明らかになっている。

今後は、潜在的性差によるサンクシヨンの存在を抽出することも必要となる。中高年の〈ひきこもり〉や 8050 問題といった言葉が流通し、一般化した。報告者の実感として「9060 問題」といった言葉が散見され始めている。本報告が本当に必要な支援を考える契機となり、脱〈ひきこもり〉支援を考える必要性を提示したいと考える

higaki@wa.seitoku.ac.jp